

神経線維腫症患者における脊椎手術の実態調査

研究分担者 筑田博隆 群馬大学医学部整形外科教授

研究要旨

DPCデータベースを用いて脊髄腫瘍切除患者5,482名の入院中の術後合併症と90日以内の再入院のリスク因子を調査した。多変量解析の結果、神経線維腫症患者は脊髄腫瘍切除術後の90日以内再入院のリスク因子であった。

A. 研究目的

近年、脊髄腫瘍に対する手術治療の術後成績不良因子として神経線維腫症が報告されている。本研究では、DPC データベースを用いて神経線維腫症患者が他の患者と比較して脊髄腫瘍手術後のadverse event 発生のリスクが高いか調査する。

B. 研究方法

DPC データベースを用いて、2009年8月から2013年3月までの入院データを抽出し、脊髄腫瘍切除術を受けた5,482名を本研究の対象とした。調査項目は手術時年齢、性別、BMI、喫煙歴、輸血の有無、糖尿病の有無、透析の有無、麻酔時間、神経線維腫症の有無とした。アウトカムは入院中の術後合併症（脳卒中、心血管イベント、肺塞栓、呼吸器合併症、腎不全、敗血症、手術を要した創部感染症）と90日以内の再入院とした。多変量解析には一般化推定方程式を用いて病院や患者の背景を調整し、各アウトカム発生に関係する要因を検討した。

（倫理面への配慮）

本研究で使用したDPCデータベースからは個人を特定する情報は抽出されない。

C. 研究結果

対象は平均年齢52.9歳、男性2800名(51.1%)、女性2682名(48.9%)であった。そのうち、神経線維腫症患者は105名(1.92%)であった。周術期合併症は154名、90日以内の再入院は243名に生じた。90日以内の再入院に関して、多変量解析の結果、糖尿病、輸血の有無、男性、神経線維腫症がリスク因子であった。神経線維腫症患者は、他の患者と比較して、90日以内の再入院リスクが有意に高かった(odds ratio, 2.05; 95% confidence interval, 1.03-4.06; p=0.04)。周術期合併症発生に関して、多変量解析の結果、高齢、透析、糖

尿病、輸血の有無、長い麻酔時間がリスク因子であった。

D. 考察

近年の報告では神経線維腫症患者は脊髄腫瘍切除における低い完全切除率のリスク因子と報告されている。本研究では、再入院という実質的なアウトカムについて調査し、新しい医学的見知を得た。

E. 結論

DPC データベースを用いた本研究において、神経線維腫症患者は脊髄腫瘍切除術後の90日以内の再入院のリスク因子であった。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表
作成中

2. 学会発表

脊髄腫瘍切除後の合併症と90日以内の再入院—
神経線維腫症はリスク因子か?—
第46回日本脊椎脊髄病学会学術集会
Journal of Spine Research, 8(3), 293, 2017

H. 知的財産権の出願・登録状況

（予定を含む。）

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし